

# 第1章 調査の経過

## 1. 地理的・歴史的環境

勝負砂古墳は、倉敷市真備町下二万 1287・1289・1290・1292・1294 に所在する古墳である。古墳は、高梁川と、その支流の小田川とが合流する地点の手前、西から流れてきた小田川に注ぐ小河川が開析した短い谷奥に立地する。開析が進んだ二つの浅い谷頭に挟まれた平たい尾根上、標高約 26 m のところに、前方部を山側の西北西に、後円部を尾根先端方向の東南東に向けて築かれている。現在、付近の斜面は広く耕地化されて一面の果樹園（ぶどう畑）となり、古墳はその中に、雑木に覆われた高まりとして残されている。後円部の南東側と北西側とは、墳丘斜面の中ほどがテラス状に削り込まれて墓地となっている。古墳からの眺望はさほど良くなく、周囲の山並みのほかは、谷奥に広がる狭い平地の一部が見て取れるにすぎない。

古墳のある小田川下流域（旧真備町域）には、縄文時代以来、とくに古墳時代の後半期と古代を中心にして、少なからぬ遺跡の分布が認められる。もっとも古いものは、小田川を 6 km ほど西へ遡った北岸にある蓮池尻遺跡で、縄文時代後・晩期の土器片等が多数発見されている〔高畑 1986〕。

弥生時代の遺跡としては、同じく蓮池尻遺跡で前期の遺物が確認され、古い段階から農耕集落が営まれていたことが判明した。この遺跡では 1915 年に流水文銅鐸が出土していることから、付近に小田川中流域の中心的な弥生時代集団が存在していた可能性が高い。そこから小田川沿いに約 2 km 東へ下った地点にある後

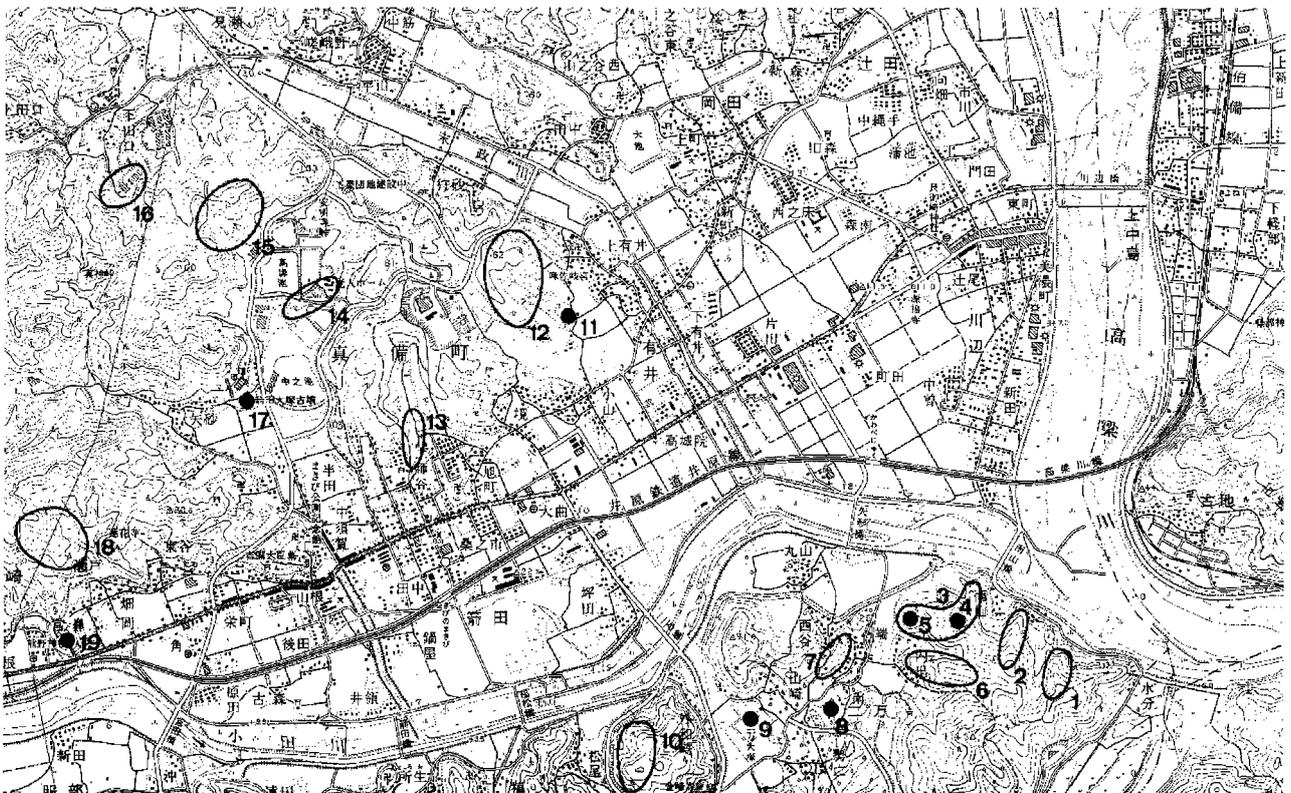


図1 周辺の墳墓（2.5 万分の 1 地形図「箭田」をもとに作成）

- 1 南山東古墳群 2 南山中古墳群 3 南山古墳群 4 天狗山古墳 5 小ぐる古墳 6 南山西古墳群 7 矢形・東谷古墳群
- 8 勝負砂古墳 9 二万大塚古墳 10 大谷大塚古墳群 11 竜王塚古墳 12 有井古墳群 13 剣塚古墳群 14 皿池古墳群
- 15 高津池古墳群 16 田口古墳群 17 箭田大塚古墳 18 瀬戸古墳群 19 黒宮大塚墳丘墓

期の黒宮大塚弥生墳丘墓では、堅穴式石室を中心とする有力層の埋葬と特殊器台・特殊壺などが発見され〔間壁ほか1977〕、これらの集団のなかでも階層の分化が起こりつつあったことがうかがえる。さらに1km東方の西山遺跡にも、特殊器台の土器棺を含む集団墓地があり、この地域の弥生後期の集団が、特殊器台を象徴とする吉備地域の集団間の紐帯に組み込まれていたことをしめす〔正岡ほか1979〕。そのほか、弥生時代の後半期に属する居住の跡が、主として小田川北岸の丘陵尾根や斜面、微高地上などに展開している。

前半期の古墳は、真備町内では明確なものは知られておらず、首長墓クラスといわれる一定の墳丘規模をもつものが現れるのは、5世紀の後半になってからである。小田川の南岸、勝負砂古墳の近隣では、北東750mの山頂にある天狗山古墳（前方後円墳・墳丘長60m）が5世紀後葉～末に築かれ、堅穴式石室からは鏡・挂甲・刀剣・鉄鏃・馬具・農具などの副葬品が発見されている〔吉備郡教育会1937、村井1966、松木・新納2001〕。

天狗山古墳と勝負砂古墳の中間に位置する小ぐる古墳（前方後円墳・墳丘長約30m）も、採集された埴輪片や埴形から、同様に5世紀後半に築造された可能性が高い。さらに、勝負砂古墳から西へ400mの二万大塚古墳（前方後円墳・墳丘長38m）は6世紀中頃の古墳で、横穴式石室から鏡・馬具・刀剣・鉄鏃・須恵器などが調査によって出土している。天狗山・小ぐる・二万大塚の3墳は、勝負砂古墳とともに互いに近接した位置に築かれており、本地域の古墳時代史を解明する上で重要である。

いっぽう、小田川をはさんだ北岸の地域では、竜王塚古墳（<sup>(1)</sup>径37×33mの円墳か）が5世紀の後半に築かれるが、年代的にこれに直統するものは見つかっていない。6世紀末になって、約1.6km西へ遡った場所に箭田大塚古墳（円墳・径46m）がある。3基の組み合わせ式石棺を収めた全長19.1mの巨大な横穴式石室から、調査により鉄製品・玉類・須恵器・土師器などが出土した〔中野1984〕。

飛鳥時代に入って古墳の造営が下火になると、小田川北岸では箭田大塚に近接して箭田廃寺が、白鳳時代には北岸に岡田廃寺、南岸に八高廃寺が営まれ、いずれも備中地域に特徴的な蓮華文瓦を伴う。奈良時代以降には市場砂走〔中田1959〕、妹坂本〔間壁・近藤1981〕、蚊箭田阿知境遺跡〔山磨1988〕、および小田川沿いに約7km西へ遡った小田郡矢掛町東三成で骨蔵器が発見されており、とくに東三成のものは下道園勝・園依朝臣母夫人（吉備真備の祖母）のものとして著名である。これらの骨蔵器は火葬の風習をもった上位階層の存在を示すものであり、小田川中流域一帯を、吉備真備を輩出した吉備氏の本拠地とする伝承とも矛盾しない。（松木武彦）

<注>

(1) これまで方墳といわれていたが、2001～2003年にわたる岡山大学考古学講座の測量実習に伴う成果として、円墳である可能性が主張されるようになった。ただし確定的ではない。

<引用文献>（著者50音順）

高畑知功1986「蓮池尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』62、岡山県教育委員会

中野雅美1984「箭田大塚古墳」真備町教育委員会

中田啓司1959「備中真備町市場の火葬墓」『古代吉備』第3集

根木智宏編1998「池田散布地・石塔鼻散布地・阿知境遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』135、岡山県教育委員会

間壁忠彦・間壁菫子・藤田憲司1977「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』第13号

間壁菫子・近藤益二1981「真備町妹坂本骨蔵器」『倉敷考古館研究集報』第16号

松木武彦・新納 泉2001『吉備地域における「『雄略朝』期」の考古学的研究』平成9～12年度科学研究費補助金（基盤研究B(2)）研究成果報告書

正岡陸夫・山磨康平・平井 勝1979『西山遺跡』真備町教育委員会

山磨康平1988「真備町箭田阿知境奥出土の骨蔵器」『古代吉備』第10集

## 2. 第1～4次発掘調査の経過

### (1) 第1次調査（墳丘測量）

第1次調査は、近隣の二万大塚古墳第1次発掘調査と併行して、2001年2月27日から同3月29日にかけて墳丘測量を行ったものである。したがって、実際には発掘の作業は行わなかったが、混乱を避ける目的で、便宜上、発掘調査回数には含めることにしている。この調査によって勝負砂古墳が前方後円墳である可能性が指摘されると同時に、墳丘周辺が相当に改変されていることもまた明らかになった。

### (2) 第2次発掘調査

第2次発掘調査は、二万大塚古墳第2次発掘調査期間の途中、それと併行しつつ、そこからメンバーを割く形で、2002年3月7日から同26日にかけて行った。周溝の有無や位置を確認するためのトレンチを推定後円部北裾と推定前方部前面（西側）にそれぞれ1ヶ所ずつ、推定前方部が墳丘の一部かどうかを確認するためのトレンチを推定前方部上面に1ヶ所、計3ヶ所のトレンチを設定した。おもな成果として、推定後円部北裾において周溝の可能性のある掘り込みを検出した。

### (3) 第3次発掘調査

第3次発掘調査は、二万大塚古墳第3次発掘調査期間の途中、それと併行する形でメンバーを割り、2003年3月9日から同31日にかけて行った。第2次発掘調査で確認した周溝の可能性のある掘り込みが、推定後円部を圍繞しているかどうかを確認することと、古墳の年代を示す遺物を得ることを目的として、推定後円部南西の推定くびれ部裾に1ヶ所のトレンチを設けた。掘り込みは確認できたが、底面上にまで古代以降の遺物が認められ、この遺構が古墳に伴うものかどうかは不明のまま終わった。なお、調査前の2月18・19日には、周溝および埋葬施設の検出を目的として、墳丘上および墳丘裾のレーダー探査を行ったが、それらに関する具体的な成果は得られなかった。

### (4) 第4次発掘調査

この第4次からが勝負砂古墳を主体とする発掘調査であり、期間も1ヶ月余りを費やすことが可能となった。第4次発掘調査は、岡山大学文学部の考古学専攻生と大学院生を中心に、2004年2月27日から同3月31日までの33日間をかけて行った。推定後円部にトレンチを設けて掘り下げに着手し、盛土の状況を確認したのち、地表下3.4m付近で埋葬施設（第7次調査で竪穴式石室と判明）の一部をなす礫および粘土の存在を確認した。また、推定前方部の南側および東側（前面）の墳丘斜面から裾にかけてそれぞれトレンチを設け、周溝の検出を試みた。南側墳丘裾は後世の溜池によって攪乱されていることが判明したが、前面に当たる東裾では古墳築造に近い時期の溝を検出した。ただし、これが古墳の周溝であるかどうかは確認できなかった。

（松木武彦）

## 3. 第5次発掘調査の経過

上記の第1～4次の各発掘調査の成果を受ける形で、第5次発掘調査は、2005年2月22日から3月22日までの30日間をかけて行った。主体部の構造・規模、墳丘構築方法、墳丘形態の把握を目的とし、推定墳頂部、同前方部、同後円部北側墳裾に調査区を設定した。

第4次からの継続調査として、推定後円部墳頂にトレンチ（墳頂部トレンチ）を設けた。第4次調査の際に一部が検出された埋葬施設の実態把握を目指して掘り下げを行った。その過程において、赤色の盛土を用いたドーム状の中途成形面を全面で検出し、計画的な墳丘の構築方法に関する情報を得た。埋葬施設に関しては目標としていた範囲全面での検出には至らず、一部で構造・方位に関わる新たな情報を得たのみに留まった。

また、第4次調査で検出した推定前方部前面の溝と墳丘との関係を確認するために、推定前方部前面斜面にトレンチ（前方部Cトレンチ）を設け、墳丘形態の確定を試みた。掘り下げの結果、後世の改変が著しいことが判明した。そのため、古墳築造当時の状況が復元困難であり、前方部であるという確実な証拠は得られなかった。

さらに、第2次調査で検出していた推定後円部北裾の掘り込みが周溝であるかどうかを確認するために、その検出部分から2.5m西（推定前方部側）に寄ったところに併行してトレンチ（後円部北トレンチ）を設けて掘り下げた。その結果、第2次調査で検出したものにとくと考えられる掘り込みが確認され、これが勝負砂古墳に伴う周溝である可能性が高いと判断された。その後、調査区を北側へさらに延ばし、周溝の幅を確認した。また、周溝が推定前方部に沿って伸びる様子が確認され、墳形確定の手がかりとなる情報を得られた。

3月12日に現地説明会を行った。また、調査期間中インターネットを通じて調査の経過およびその成果を随時紹介し、情報の公開をした。（石坂泰士）

#### 4. 謝辞

勝負砂古墳の第1～5次の調査を通じ、（旧）真備町教育委員会のご指導とご助力を賜った。とくに社会教育課長山田守氏と同主査藤原憲芳氏（いずれも当時）には、発掘調査の行政手続き、地元下二万地区との調整などにご尽力をいただいた。深謝申し述べたい。

地権者の井上友則氏、井上正人氏、井上栄二氏、鳥羽馨氏、井川三喜次氏には、発掘調査を快諾いただいたのみならず、調査地の事前環境整備などの多大なご協力を賜った。また、古墳近接地の地権者である井上伯海氏、井上憲二氏、井川勉氏には、古墳までの通路、用水、簡易便所の用地貸与などの便宜を図っていただいた。近在の有限会社守屋自動車・守屋忠和氏には、駐車場の提供、発掘作業に関わる助言や技術の供与など、さまざまなご尽力を賜った。勝負砂古墳の発掘調査は、これら下二万地区の方々の寛大なご理解・ご協力と暖かい激励なくしては成り立たなかったであろう。心から感謝申し上げる。

なお、勝負砂古墳の発掘調査は、近隣の天狗山古墳（1998～2000年度調査）、二万大塚古墳（2001～2004年度）の調査とともに、『雄略朝』プロジェクトの一環をなすものとも位置づけられている。本プロジェクトは、新納泉・松木武彦および宇垣匡雅（赤磐市教育委員会、原所属は岡山県古代吉備文化財センター）の3名を共同研究者、野崎貴博（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター）・光本順（同）・高田貫太（同・現奈良文化財研究所）・藤原好二（倉敷埋蔵文化財センター、2007年度から）の4名を研究協力者として、岡山大学文学部・同大学院文学研究科・社会文化科学研究科に所属する考古学専攻の学生と大学院生を中心に、5世紀後半を中心とする時期の吉備地域の古墳の動向を解明する研究プロジェクトである。勝負砂古墳の発掘調査は、宇垣氏をはじめとする上記プロジェクトメンバーのご助言やご協力のもとに行われたことを、感謝の気持ちとともに明記しておきたい。（松木武彦）

## 第2章 第1～4次発掘調査の概要

### 1. 墳丘測量の成果

墳形は前方後円形に近いが、推定前方部が畑によってかなり削平・改変を受けており、また推定後円部の中腹付近も墓地によって削られている。そのために、墳形は、測量図（図2）による判断だけでは確定しがたい。墳形についてのさらに詳細な検討は、本章第3・4節で述べる周溝ならびに墳丘の調査成果にゆだねることとする。

墳丘規模については、推定後円部の裾の部分のレベルが前方部の墳端部分と一致せず、推定前方部がどこまで西側に伸びるかが不確定であるが、畦道で区画された部分を前方部の墳端ととらえると、墳丘は現存で全長約38m、後円部径約30m、後円部墳頂平坦面径約10m、前方部長約8m、後円部の比高差は約6.5mを測る。後円部の大きさに比べて前方部と思われる部分が短く、後円部の裾の部分と頂上との比高差が大きいのが特徴である。ただし、以上の各数値はあくまでも測量図から読みとれる計測値に過ぎず、さらに精確な墳丘規模の判断は、本章第3・4節での周溝および墳丘の調査成果を参照されたい。（井上宗嗣）

### 2. 調査区の配置

第1～4次の発掘調査で設けた調査区（トレンチ）の配置とそれぞれの目的を、墳丘の箇所ごとに整理して述べたい（図2）。まず、調査用の地区割りとして、墳丘中軸線（BAライン）と、推定後円部中央点でそれに直交する線（10ライン）をそれぞれ縦横の基軸線として5mのグリッドを設定した。各トレンチは、基本的にこのグリッドに沿い、以下のように配置した。

**前方部Aトレンチ・前方部Bトレンチおよび第1トレンチ・第2トレンチ** 推定前方部が墳丘の一部であるかどうかの判断を下し、さらにその南側裾部にも周溝がめぐらされているかどうかを確認するため、第4次調査において、推定前方部上面から南側斜面および裾にかけて前方部Aトレンチを設定した。推定後円部中央点で墳丘中軸線と直交する10ラインに20m西側で平行する線に沿う、長さ15m・幅1mのトレンチである。また、推定前方部の前面で周溝の有無を確認するために、同じく第4次調査で前方部Bトレンチを設けた。墳丘中軸線に沿った長さ3m・幅1mのトレンチである。さらに、これらに先立つ第2次調査において、前方部Bトレンチから墳丘中軸線に沿ってさらに2m西へ離れた箇所に、1m×1mの第1トレンチを設定している。また、推定前方部が推定後円部と接するところの墳丘上面に、1m×1mの第2トレンチを設けている。

**第3トレンチ・第4トレンチ** 推定後円部の北側裾で周溝の有無を確認するために、第2次調査において、推定後円部中央点で墳丘中軸線に直交する10ラインに沿い、長さ10m・幅1mの第3トレンチを配した。トレンチの南端は墳丘斜面下端部にかかるように設定した。さらに、推定後円部と推定前方部が接する部分、すなわちくびれ部の南側墳裾では、周溝の確認と古墳に伴う遺物の発見を目的として、長さ10m・幅2mの第4トレンチを第3次調査時に設けた。このトレンチのみは墳丘の地区割りに斜交させ、北東端が墳丘斜面下端部にかかるようにしてある。

**墳頂部トレンチ** 推定後円部墳頂には、墳丘盛土と埋葬施設の調査を目的として、第4次調査の際に墳頂部トレンチを設定した。第4次調査では、推定後円部中央点のBA10杭を中心とする6×6mの正方形とし、墳丘中軸線に沿って推定前方部方向に幅1m・長さ2.5mの出っ張り部分（西拡張部）を設けた。

以下の第3・4節では、上記各トレンチの成果を概述する形で、第1～4次調査で判明した墳丘と周溝の状況についてまとめることとする。（松木武彦）

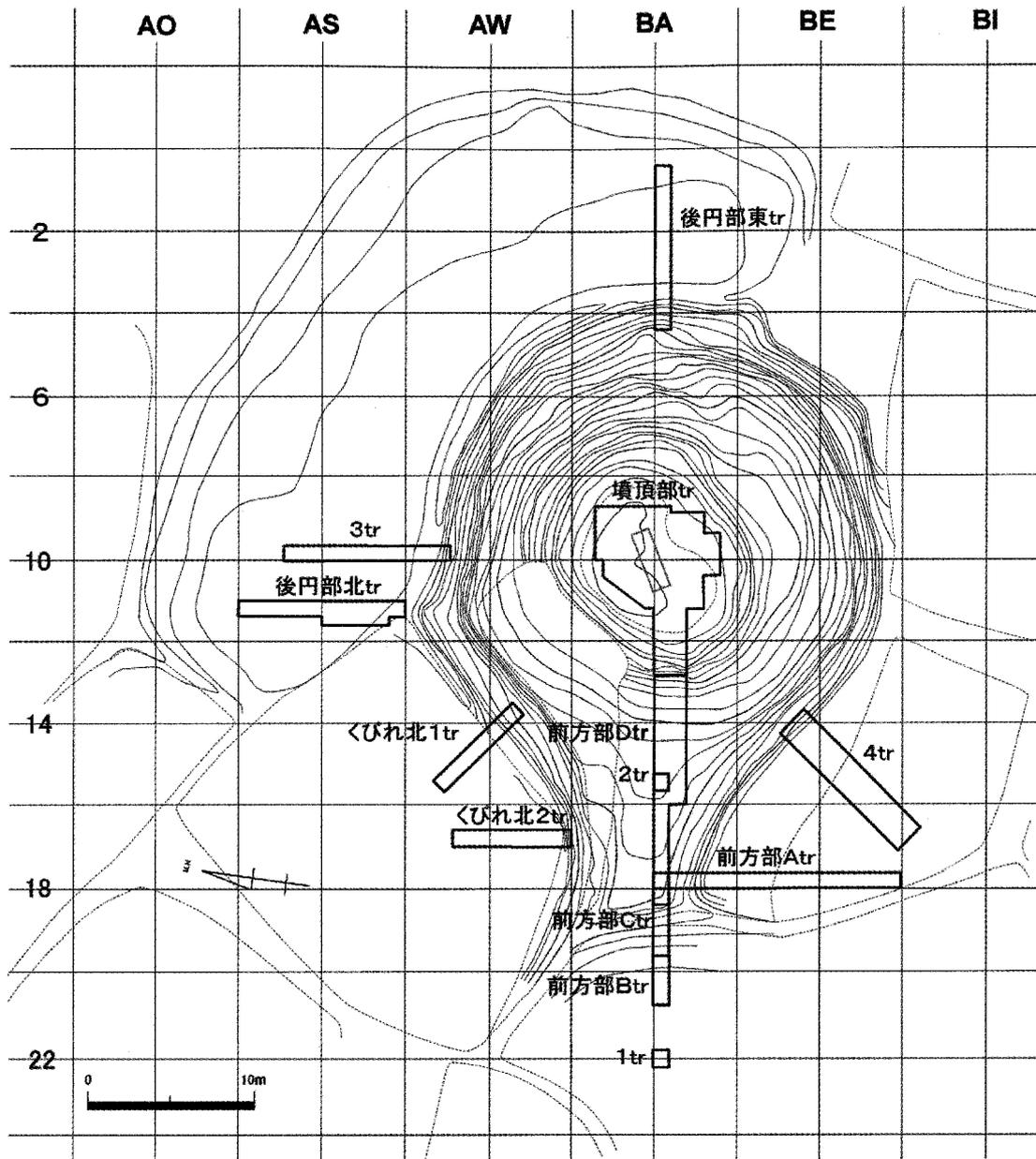


図2 墳丘とトレンチ配置

### 3. 周溝の状況 (図3)

**推定後円部北側の溝** 推定後円部北側裾の第3トレンチ (図2・3) では、周溝の可能性をもつ掘り込みを検出した。外側 (墳丘の反対側) の肩は未検出であるが、底面の湾曲から判断すると全幅は推定7mで、断面形は浅く緩やかな弧を描いている。深さは、現地表面から約1.25mである。掘り込み自体は赤橙褐色の基盤層を削り出したもので、その後に流入土と、近年の畑作に関わる造成土・耕作土が畧重している。流

入土は、まず外側の周堤と考えられる側より流れ込んだ淡黄褐色土が掘り込みの底に堆積した後、墳丘側より黄橙褐色土が流れ込んでおり、続いて黄橙褐色土上に黒褐色土層が堆積するが、これは腐植などにより黒褐色土層が形成された可能性がある。黒褐色土層より上の橙褐色土層および暗褐色土層もまた流入土と解釈しうるが、その両端で著しい掘削または攪乱を受けており、切り合い関係の判断材料が乏しいため、これらが墳丘側と外側のどちらから流れ込んだかを特定するのはむずかしい。最上層の暗橙褐色土は、近年の畑作に伴う造成土ないし耕作土と考えられる。

なお、第3トレンチ付近は、とくに墳丘寄りの南半部で、近年の耕作（桑畑・のちにぶどう畑）に伴う掘削などの大きな地形の改変が認められた。墳丘裾部を削り込んだ後、さらに畑に付属する排水溝を造るための掘削が行われたと解釈できる。現在みられる墳丘裾部の溝とそこに堆積した暗褐色土層は、この排水溝への最近の流入土である。古墳築造時は、掘り込みの最深部から南へと弧を描いて高まる底面が、そのまま上昇して墳丘斜面へとつながっていたと考えられる。

第3トレンチの出土遺物には、須恵器片・土師器片・埴輪細片・弥生土器片およびその他の土器片があるが、古墳に直接伴うものは確認できない。(榎原康剛)

**推定くびれ部南側の状況** 推定くびれ部南側裾の第4トレンチ（図2）においても掘り込み状の落ちが確

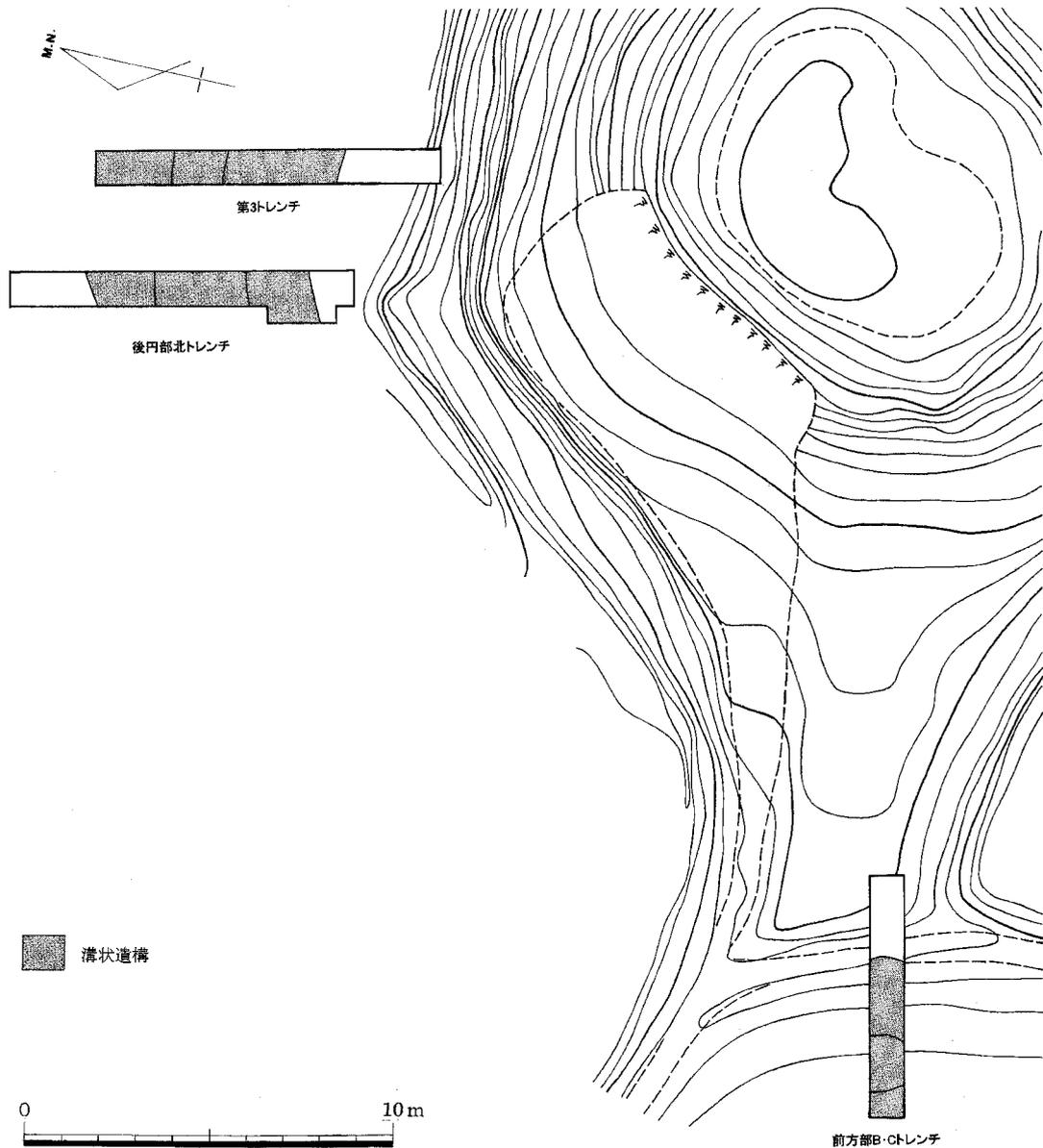


図3 周溝の復元

認められた。外側（墳丘の反対側）の肩は未検出のために幅は確認できないが、深さは、現地表面から1.2 mである。ただし、墳丘側の肩は、現状の墳丘斜面下端よりも約3.5 m南西に離れたところにある。墳丘斜面下端から落ちの肩まで続く平坦面は、その上面から江戸時代以降のものと思われる染付陶器片が出土したため、それ以降の改変の結果と考えられる。

落ちは赤橙褐色層を基盤とし、流入土が堆積している。墳丘側から暗黄褐色土、外側から暗褐色土が流入したのち淡黒褐色土が堆積するが、その上の黒褐色土は、腐植などによって形成された可能性がある。それより上位の暗橙褐色土が最上位の流入土とみなされる。さらにその上の、墳丘裾から落ちの上面までを一様に覆う黄褐色土層は、先述のように江戸時代以降の改変に伴う造成土と考えられる。

落ち自体も、流入土最下層である暗黄褐色土層中から古代以降のものと思われる竈片が出土したことから、少なくとも古代以降に底面近くまで人為的な改変が及んでいる可能性が高い。さらに、底面にあたる部分では性格不明の被熱土壌が検出された。検出面は底面である。長径101cm・短径83cmの楕円形を呈し、深さは16cmを測る。壁面は被熱のために赤変し、埋土下層は炭化物と焼土を大量に含んでいた。上層には乳児頭大の礫が充填され、その間に下層流入土である暗褐色土が入り込んでいた。

落ちの出土遺物には、弥生土器片・土師器片・埴輪片・須恵器片・黒色土器片・竈片・土鍋片・不明鉄器片などがある。埴輪片は、タテハケのみを施すものとヨコハケの認められるものがある。須恵器片は、TK43型式～TK217型式以降と時間幅が広い。(和田大作)

**推定前方部南側の状況** 推定前方部の墳丘上から南側裾にかけて設けた前方部Aトレンチ（図2）では、墳裾の平坦面にあたる部分が、もとは現地表面からの深さ約1.2 mにまで下げられ、その上にシルト・砂の互層からなる水性堆積層を含む流入土と、土壌の粗野なブロックを含む人為的な埋め立て土が堆積している状況が確認された。地元の古老によると、この場所には戦前に溜池が存在したということであり、上記の堆積は、溜池の埋積土と埋め立て土である可能性が高い。

この堆積からの出土遺物には、土器片・埴輪片・須恵器片のほか、江戸時代以降とみられる陶磁器片・瓦片などが混じっている。(松木武彦)

**推定前方部前面の溝** 推定前方部前面に設けた前方部Bトレンチ（図2・3）では、前面を横切る溝状の遺構と考えられる掘り込みが確認された。両方の肩とも確認できていないが、トレンチ西端（墳丘とは反対側）から西へ2 mの地点に設けた第1トレンチでは、底面すなわち基盤面の標高は、前方部Bトレンチ西端のそれよりも60～70cmほど高い。また、トレンチ東端から4 mに当たる前方部Aトレンチでも、後述のように、60～70cmほど高い位置に前方部の墳丘本体をなす基盤層の上面がある。これらを勘案すると、前方部Bトレンチのほぼ中央を最深部とする幅5～6 m内外の溝が、前方部の前面を横切る形で走っていた可能性が高い。基盤は赤褐色土である。

流入土は大きく3層に分かれ、最下層の黄褐色土層は中央付近にしか認められない。その上の灰褐色土層には多数の埴輪片が含まれている。流入方向は確定できず、勝負砂古墳に伴うものか断定するには至っていない。その他に灰褐色土層の上層から雁又式鉄鏃が1点出土している。また、須恵器片・土器片が少量出土した。さらにその上の黄橙褐色土層の下層から瓦片が出土していることから、後世の攪乱を受けている可能性も考えられるが、埴輪の流入状況は原状を保っていることから、溝状掘り込みそのものは、ほぼ古墳の築造に近い時期に遡るものとみられる。流入土の上に約60cm～1 mの厚さで載る2つの層は、畑の造成に伴う造成土と考えられる。(森 仁優・松木武彦)

#### 4. 墳丘の状況

**推定後円部の盛土と乱掘墳** 墳頂部トレンチ（図2）では、現墳頂面を約10cm前後掘り下げたところで、最終的に遺構面を確認でき、不整形の掘り込みを検出した。さらに掘り下げた結果、この掘り込みはほぼ上からの不整形円形と横からの長楕円形の、二つの掘り込みが重なっていることが確認され、ともに乱掘墳であると考えられる。また、墳頂中心部から深さ1.8 mのところから赤褐色のドーム状の盛土を検出した。乱掘墳

は赤褐色のドーム上盛土の上面をわずかに抉ったところまでで止まっており、埋葬施設にまでは至っていない可能性が考えられた。埋葬施設の確認を行うため、赤褐色のドーム状盛土を断ち割ったところ、墳頂から深さ3.4mで埋葬施設の可能性がある石組遺構とそれを覆う淡青灰色粘土を確認した。この埋葬施設に伴う墓壇は検出されない。そもそも、推定後円部の大きさを考慮すると、深さ3mにもおよぶ墓壇は掘り込み得ないので、この埋葬施設は、少なくとも現墳頂面から掘り込んだ墓壇はもたない可能性が高い。

乱掘墳とみられる掘り込み内から埴輪片・瓦器片・陶器片が出土している。埴輪片は小片であり、勝負砂古墳に伴うものかどうかは不明である。また、乱掘墳埋土から20世紀代の陶器片が出土していることから、乱掘墳も20世紀代に掘られた可能性がある。(笹栗 拓)

**前方部上の盛土** 前方部上面にあたる前方部Aトレンチ(図2)の北半部分では、現墳丘最上面よりも約1mの深さで赤褐色の基盤層を検出した。基盤層直上の厚さ約20cmの明赤褐色土層は、遺物を含まず汚れも少ない締まった土であることから、墳丘盛土と考えられる。ただし、基盤層との間に旧地表面の痕跡は認められない。その上の約50cmの土は3層に分けられ、最下層の赤褐色土に中世土器片を含むので、後世に盛り重ねられた可能性が高い。さらに上の橙褐色土層・礫混じり黒褐色土層は、中世以降、現代に至るまでの多数の陶磁器片・瓦片などを含み、新しい時期に盛り重ねられた土と判断できる。(松木武彦)

## 5. 出土遺物

### (1) 埴輪(図4・5)

約500点の埴輪片が出土しており、大部分は前方部Bトレンチからの出土である。いずれも小片で、全形を窺いうる資料はない。現在のところ、円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪が確認でき、円筒埴輪片が大部分を占める。ただし、先述のように、これらの埴輪が勝負砂古墳に伴うものである確証は得られていない。

円筒埴輪の外表面調整はヨコハケ、タテハケ、ナナメハケの3種類があり、ヨコハケを施したものには静止痕が認められるものもある。個体復元できるものがないため1個体における外表面調整の施し方については不明であるが、突帯をはさんでタテハケとヨコハケの両方をもつ破片もある。内表面調整はヨコハケ、タテハケ、ナナメハケ、指によるナデが確認できる。突帯の形状は台形や断面「M」字状を呈するものがあり、なかには押圧技法と思われるものも含まれる。透かし孔は円形である。基底部は基底部調整を行っているもの(図4-3)もあり、復元径は22.5cmを測る。器壁の厚みは口縁部で0.8～1.2cm、基底部で1.9～2.2cm、その他の部位で0.8～1.5cmほどであり全体的に薄手である。焼成はあまいものから良好なものまであり、須恵質のものも含まれる。黒斑は確認できない。朝顔形円筒埴輪の頸部と思われる破片も出土しており、復元径は約13cm(図4-1)、約24cm(同2)である。

これらの資料は、外表面調整ヨコハケを指標とする川西編年Ⅳ期の特徴と、押圧技法・基底部調整を指標とする川西編年Ⅴ期の特徴の両方を示している。よって、天狗山古墳・二万大塚古墳出土の埴輪よりも古いものである可能性もあるが、系統差を示しているとも考えられる。(片山健太郎)

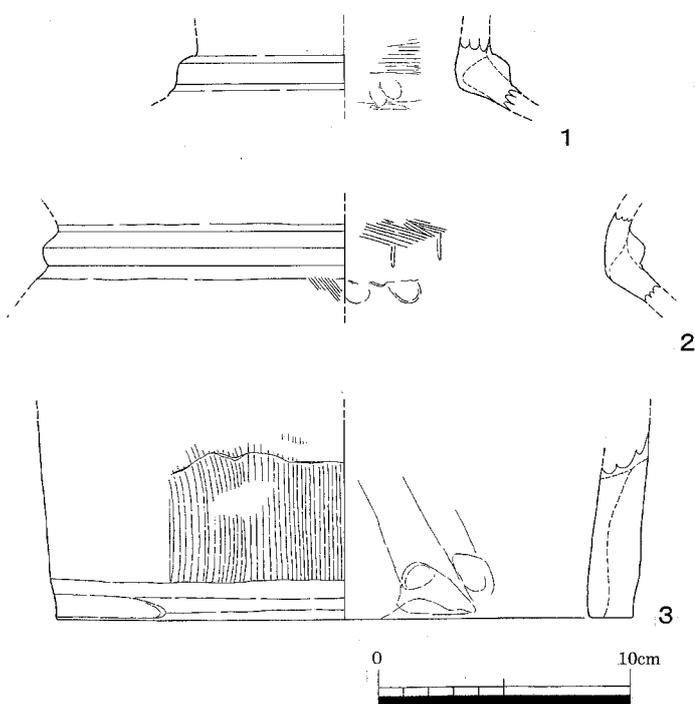


図4 出土遺物(1) 埴輪

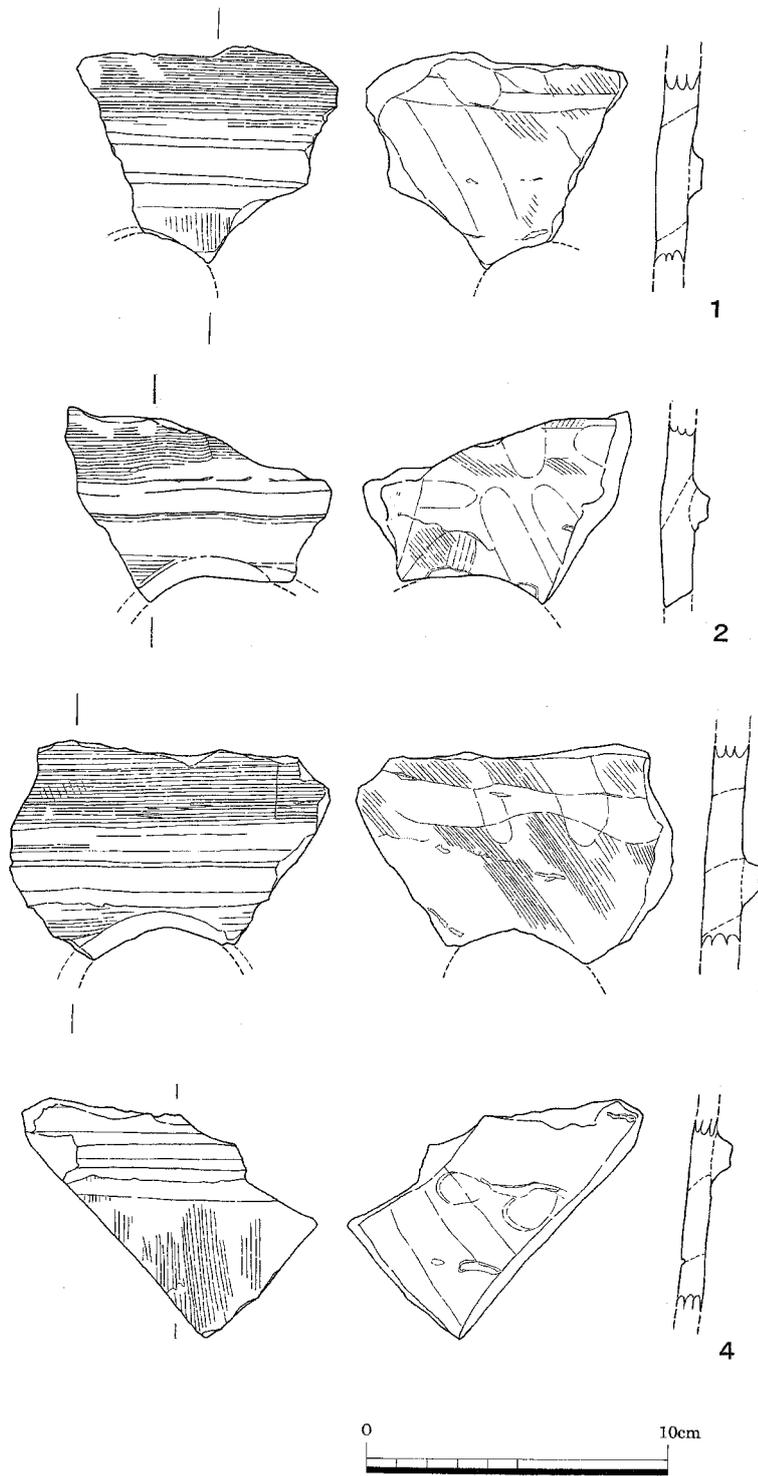


図5 出土遺物(2) 埴輪

トレンチでも出土している。

陶器・磁器に関しては、前方部Aトレンチ出土のものがほとんどで、19世紀代に比定されるものも散見できるが、多くは20世紀以降のものであり、大半は新しい時期の盛り重ね土から出土している。

その他では、土師質の甑の取手などがある。しかし多くは時期・器種が不明な小片である。古墳周辺の畑で弥生土器の高杯の脚部が表採されていることから、弥生土器が含まれている可能性がある。(笹栗 拓)

(2) 須恵器(図6)

須恵器の大半は前方部Bトレンチから出土した。しかし、出土量も少なく、後世の盛り重ね土や流入土からであるため、勝負砂古墳に伴うものかどうかは確認できない。図5-1～3はすべて前方部トレンチから出土したものである。

提瓶(図6-3)は、内面に成形時の円孔の痕が確認でき、外面の胴部には同心円状にカキメが施されている。甕(同2)は、復元口径17.4cm、口縁部はあまり外反せず、直立的に外上方に伸びる。肩部にはカキメが施されている。甕(同1)は、復元口径32.8cm、口縁部はあまり外反せず、外上方に伸びる。頸部には2条の沈線の下に斜め方向のヘラ描き沈線文を配し、さらにその下に沈線がめぐっている。(森 仁優)

(3) その他の土器

前方部A・Bトレンチから多くの黒色土器片・瓦器片・陶器片が出土した。また、推定くびれ部南側裾の第4トレンチからも、黒色土器片、竈片、土鍋片などが見つかった。

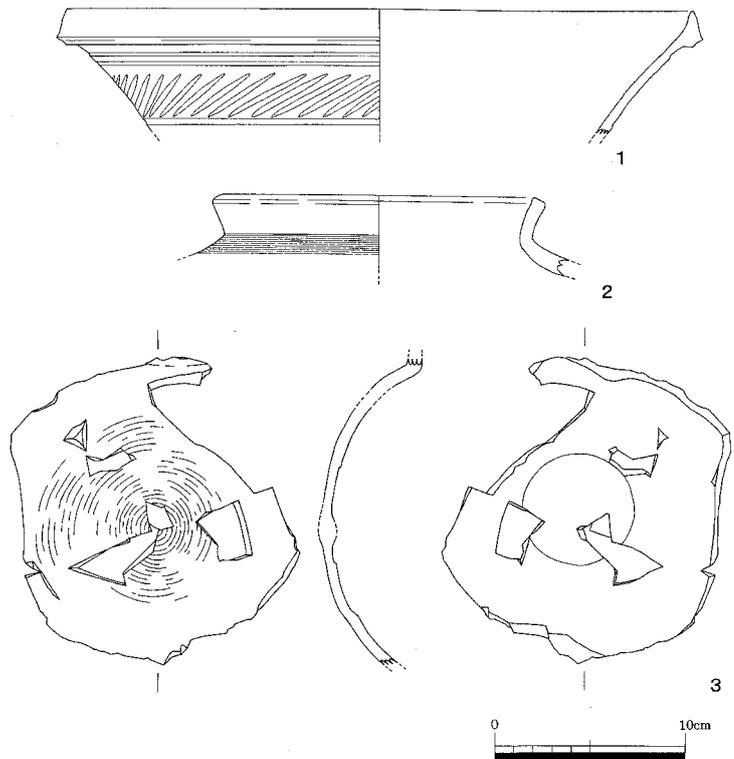
黒色土器は、内黒(内面のみ炭素を吸着させたいわゆるA類)と、両黒(内外両面に炭素を吸着させたいわゆるB類)がそれぞれ存在し、椀の口縁部や高台椀の底部もあるが、その多くは小片である。

瓦器は、羽釜などの小片が少数出土している。羽釜は墳頂部トレンチ出土のもので、羽の部分の長さが1.9cm、厚さ0.5cmで、同様の羽釜は前方部A

## (4) その他の遺物

石匙・雁股式鉄鎌・瓦質祠片が出土している。前方部Aトレンチから出土した縦型の石匙は、ほぼ完形で長さ4cm・幅1.7cmである。石材にはサヌカイトが用いられている。前方部Bトレンチから出土した雁股式鉄鎌は、切先の一部が破損しているがほぼ完形である。二股部は抉りが浅く、ほとんど開かない。鎌身関部をしっかりと作り出している。類例に乏しく、現在までのところ時期不明であるが、古代以降の可能性もある。また、前方部Aトレンチからは瓦質祠の棟部の破片が出土している。

(片山健太郎)



<注>

(1) 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』  
第64巻第2号

図6 出土遺物(3) 須恵器

## 6. 第1～4次調査成果のまとめ

以上に概述した各トレンチの調査結果をもとに、第1～4次の調査で得られた知見をまとめておきたい。

まず墳丘については、測定の結果をみるかぎり、全長38mほどの前方後円墳とみられる。推定後円部の少なくとも北側裾には幅約7mの掘り込みがあり、周溝と考えられる。いっぽう、南側一帯は後世の溜池などのために改変され、周溝はあったとしても、すでにほとんどが削平された可能性が高い。

推定前方部前端的溝状掘り込みは、その位置と形態から周溝の一部と推測される。この溝状掘り込みの底面のレベルは、推定後円部南側の周溝状掘り込みのそれに比べて約1.5m高いという問題を残す。しかし、推定前方部前端的周溝がやや狭く浅い例がしばしば見受けられことも勘案し、さらに周辺の地形も考慮すると、勝負砂古墳が前方後円墳である場合のもっとも蓋然性の高い前方部前端的は、この位置とみなされよう。すなわち、現状の推定前方部は本来の前方部の形状をほぼ反映するものと推定されるのである。

推定後円部の少なくとも上半部は盛土によるもので、墳頂から深さ3m以上のところに粘土と礫からなる埋葬施設をもつと考えられる。この埋葬施設は、少なくとも墳頂から掘り込まれるような墓壙をもたず、上部には盛土が施されている。盛土は途中でドーム状の整形面をもつらしく、このドーム状盛土の最上面は、現墳頂下約1.8mのところにある。乱掘壙がこの最上面にまでしか及んでいないことから、埋葬施設は未掘のまま残されている可能性が考えられる。

葺石・埴輪列などの外表施設は確認されず、古墳に確実に伴う埴輪や須恵器などの遺物も発見できなかった。

(松木武彦)

## 第3章 第5次発掘調査の成果

### 1. 調査区の配置

第5次発掘調査では、第1～4次調査で設定した地区割に沿って、3ヶ所のトレンチを設定した(図2)。

**後円部北トレンチ** 第2次調査の第3トレンチで検出していた推定後円部北裾の周溝状掘り込みの広がりを押さえ、それが周溝であることを確認するために、第3トレンチの2.5m西(推定前方部側)に併行して、後円部北トレンチを設けた。当初は、11ライン沿いに、ASラインからAUラインまで長さ5m・幅1mで設定したが、周溝状掘り込みの幅と方向を確認するために、調査途中で北に5m、AQラインまで延伸して長さ10mとし、さらに一部の幅を50cm南に拡張して1.5mとした。拡張部分は、ASラインから南に2m分である。

**前方部Cトレンチ** 第4次調査の前方部Aトレンチ北端で検出した推定前方部の墳丘面と、前方部Bトレンチで検出した前方部前面の周溝状の掘り込みとの関係を確認するために、墳丘中軸線に沿って、前方部Aトレンチ北端と前方部Bトレンチとをつなぐ前方部Cトレンチを設定した。長さ3m・幅1mである。

**墳頂部トレンチ** 第4次調査に引き続き、墳丘構築方法の解明、とくに赤褐色のドーム状盛土の全面検出と精査、および埋葬施設の種類・規模・方向等の把握を目的として調査を進めた。

ただし、当初の予測以上に深い掘削となるために、東と北に0.5m、南と西に1m拡張を試みたが、安全確保や障害物などの理由で拡張しなかったところもあり、結果的には最大で7.5m×7.5mの略正方形となった。西拡張部も西へ2m延伸すると同時に幅を1m拡張し、最終的には長さ4m・幅2mとした。

掘り下げは、墳丘中軸線およびそれに直交する線に沿って地層観察用の畦を十字形に設け、トレンチを4区分して行った。分割した4区は、北東部(後円部寄りの北側)をNE区、南東部(後円部寄りの南側)をSE区、北西部(前方部寄りの北側)をNW区、南西部(前方部寄りの南側)をSW区とよぶ。西拡張部はSE区に接続する。  
(秋山奈美・森 仁優・山梨千晶・松木武彦)

### 2. 後円部北トレンチ

**調査の経過** トレンチ全面で基盤と考えられる層まで掘り下げを行い、確認のため11ライン沿いに断ち割りを設けた。その後、この溝状掘り込みの両側の肩を検出して幅を確認するためにトレンチを北へ5m延伸し、同時にこの掘り込みがどのように墳丘をめぐるかを詳しく検討するために、ATラインから南へ2m分をトレンチ西壁から50cm拡張して、底をなす基盤層を全面で検出した。

**調査の成果**(図7) 第2次調査の第3トレンチで検出されたのと同様の溝状掘り込みを検出した。断面形は緩やかな弧を描いており、幅は約6.5m、深さは最深部で現地表面から約1.2mある。底面は緩い円弧を描く。墳丘側にあたる南側の斜面上方、現在の墳丘裾に近い箇所には緩い段がついている。この段が溝状掘り込みの掘削に伴う本来のものか後世の改変によるものかは、本トレンチでは確定できないが、第2次調査の第3トレンチでは同様の段を後者と判断している。なお、北側斜面には段は確認されなかった。

層の堆積状況は第3トレンチとほぼ同様である。黄橙褐色土が流入した上に黒褐色土がレンズ状に堆積し、さらにその上に暗褐色・橙褐色土が流入。堆積している。これより上層は近年の畑に伴う造成土あるいは耕作土である。ただし、本トレンチにおいて基盤層直上で確認された暗灰褐色土層(図7・9層)は第3トレンチでは確認されておらず、この層は10ラインよりも西側に堆積していると考えられる。

また、墳丘側の拡張部分で、この溝状掘り込みの墳丘側の肩が推定後円部に沿って曲がっていく様子が確認されており、溝状掘り込みはこのまま現在の推定後円部に沿う形で墳丘をめぐる可能性が高い。勝負砂古墳が前方後円墳であるならば、溝状掘り込みは本トレンチよりも西側で、推定前方部の形状に沿って曲がっていくと考えられる(図3)。

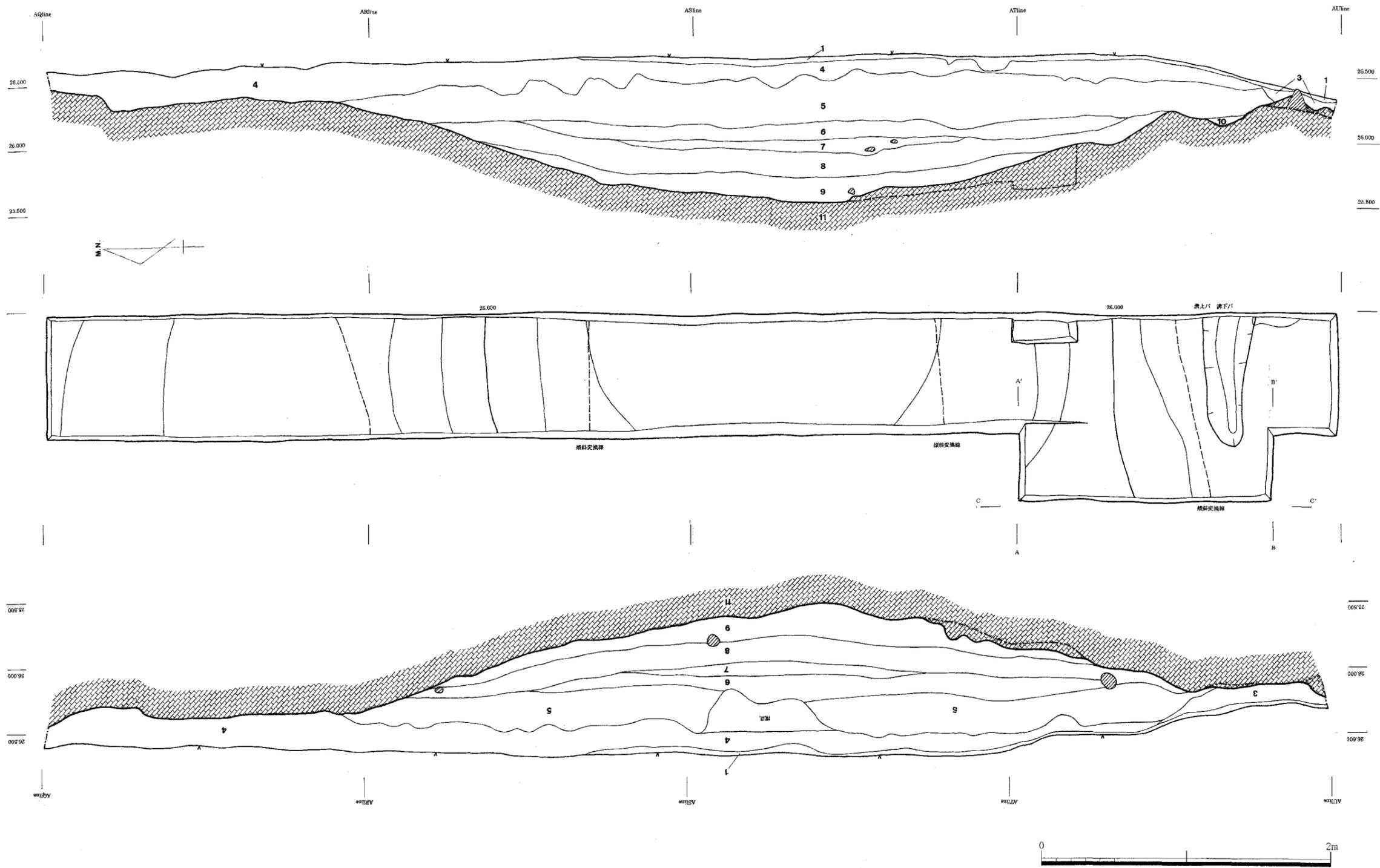


図7 後円部北トレンチ平面図・断面図 (土層注記は p. 26)

全体として、第2次調査の第3トレンチで確認された溝状掘り込みは、少なくとも現推定後円部北側においては同じ形状で現墳丘の外形に沿って走ることが確認され、古墳に伴う周溝である可能性が高くなった。

**出土遺物** 埴輪片・須恵器片・土器片が出土している。その多くは小片である。古墳時代の遺物は少なく、これらの遺物が勝負砂古墳に伴うものかどうかは不明である。(山梨千晶)

### 3. 前方部Cトレンチ

**調査の経過** 推定前方部墳丘上から前端斜面に当たるトレンチの東半分では墳丘盛土とみられる明赤褐色土層上面を、第4次調査の前方部Bトレンチで検出された推定前方部前面の溝状掘り込みに至る斜面に当たる西半分では基盤層の赤橙褐色土上面をそれぞれ遺構面とみなして、全面を検出した。その後、盛土と考えられる明赤褐色土層を半裁し、トレンチの北半分を基盤層上面まで掘り下げた。

**調査の成果** (図8) トレンチ西端近くでみられる基盤層の落ち込みは、その直上の暗褐色土層(図8-18層)が前方部Bトレンチで検出された溝状掘り込みへの流入土と同一層とみなされることから、溝状掘り込みへの落ち際であると考えられる。ただし、この暗褐色土層のすぐ上に載る暗黄褐色土層(17層)は、前方部Bトレンチの溝状掘り込みの上に載る畑の造成土の続きであり、これが前方部前端の墳丘面にまで延びていることが確認された。さらにこの層の上には、赤色系と暗褐色系の土を用いた後世の盛り重ね土が互層状に施されている(8~14層)。この互層上の盛り重ね土は、トレンチ東半部では、明赤褐色土層(19層)およびその上の赤褐色土層(16層)・暗赤褐色土層(15層)に載りかかっている。このうち赤褐色土層(16層)からは中世土器片が出土しており、これより上は後世に盛った土と考えられるが、下の明赤褐色土層(19層)は遺物を含まず、また非常にしまりが強いことから、古墳に伴う盛土の可能性はある。古墳築造時に近い流土の層は確認されず、第4次調査の前方部Bトレンチで出土した埴輪片の流入方向は確定できなかった。

このように、本トレンチ内のほとんどの箇所では、後世に形成された地層が、現存の墳丘遺構面にじかに接していることから後世の改変を受けていると考えられ、古墳築造時の形態がどれほど保たれているかは判断しがたい。地山の削り出しの痕跡や確実に古墳に伴う盛土など、墳丘の原状は精確には復元できず、前方部端の確定はできなかった。

**出土遺物** 遺物は、ほとんどが、後世に盛られた土である橙褐色土層(5層)からの出土であり、他の後世の盛り重ね土では8層から土器片が1点、11層から埴輪片4点・須恵器片1点・土器片1点が出土しているのみである。(山梨千晶)

### 4. 墳頂部トレンチ

**調査の経過** (図9~11) 前年度の第4次調査時の埋め戻し土を除去し、本年度に拡張する部分の掘り掘りを行った。第4次調査で墳丘構築過程の一段階と考えられたドーム状盛土上面(図10・11-318・328・330層)の全面検出を目指し、各区画で掘り下げを進めた。図9のA-A'ラインとB-B'ラインで4分割された北東・北西・南東・南西の各区を、それぞれNE区・NW区・SE区・SW区とよぶ。SW区から前方部に向かって4m延伸した部分を西拡張区と称する。

まずSW区・西拡張区およびNE区の東壁面で、標高約32.0~32.5m付近を環状にめぐる黒色盛土の面を検出した。また、NE区では、標高31.7~31.8m付近の盛土中に列上に並ぶ石を検出した。これらが副次的な埋葬施設である可能性も考えられたため周囲の精査を行ったが、墓壙や棺などの痕跡は確認されず、盛土構築の一工程として置かれた石と判断した。その後、NE区の盛土中に、径約60cmの略楕円形にきわめてしまりの悪い範囲がみられたため、輪郭を検出し半裁して掘り下げたところ、この乱れは下位のドーム状盛土にも及び、その部分のドーム状盛土上面がひび割れて陥没していることが判明した。SW区では、一部で検出したドーム状盛土の全面検出を目指し、西拡張部へと広げていったところ、灰色がかった赤褐色土(図10-290層)を検出した。この層とドーム状盛土との関係を把握するために、先行トレンチを設定し、こ

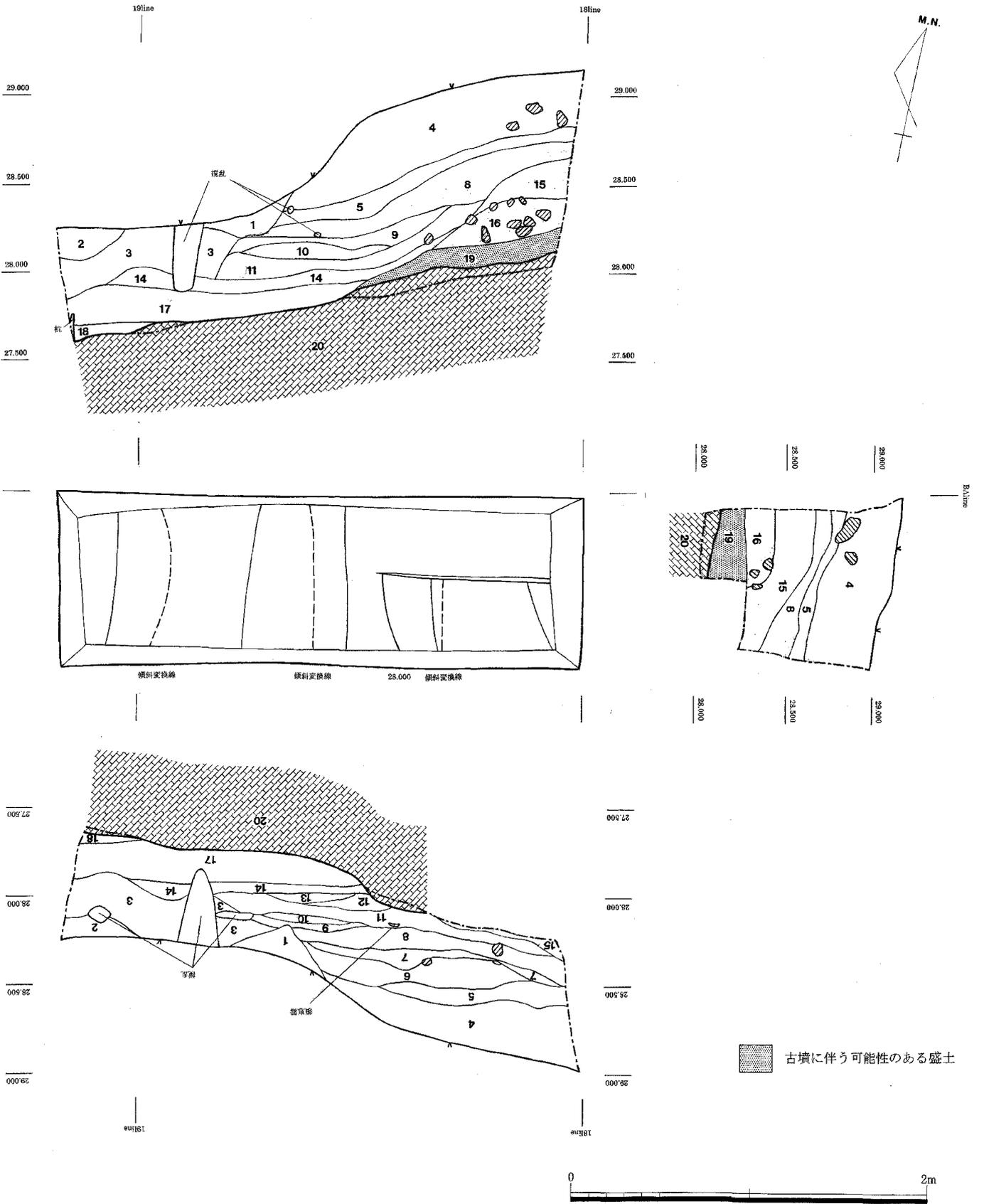


図8 前方部Cトレンチ平面図・土層断面図（土層注記はp.26）

の層がドーム状盛土と一連ではないことを確認した。S E区・NE区・NW区においても、層の厚さに違いはあるが、ドーム状盛土に酷似した層がそれよりも上位にも断片的に盛られる状況がみられる。西拡張部でこの層を掘り下げたところ、ドーム状盛土の直上で灰色の粘質土を検出した（図版3）。この灰色粘質土層（図10-317層）はSW区の南西隅まで帯状に広がっていた。

その後、地層観察用畦を除去して、各区画の全面でドーム状盛土上面を検出・記録した後（図版3）、ドーム状盛土以下の盛土構築過程を把握するため西拡張部に先行トレンチを設定し、S E区では前年度の第4次調査時で設けた先行トレンチの拡張を行った。

西拡張部先行トレンチでは、標高29.8cm付近で弥生時代の遺物を包含した地山の可能性が考えられる層（図10-327層）を検出した。この層が地山である場合、第4次調査で検出した埋葬施設に伴う粘土と考えられる層の標高より高いことから、埋葬施設には墓壇がある可能性が考えられた。327層とドーム状盛土との関係を確認するために、先行トレンチを墳丘中軸線沿いに東へ5m延伸し、327層は盛土であることを確認した。その後、地山の検出を目指して先行トレンチ西部で掘り下げを続行し、基盤層と考えられる層（図10-383層）を検出した。また、ドーム状盛土は、西拡張部内の12ライン付近まで達していることが確認できた。

S E区の先行トレンチでは、埋葬施設の一部と考えられる淡青灰色粘土の端を確認するため、先行トレンチを東側に75cm拡張した。その結果、第4次調査で検出した粘質土と一連の凹凸の激しい灰褐色の粘質土（図10-372層）および角礫群を確認し、埋葬施設を被覆すると考えられる精良な粘土の端は（図10-367層・370層・373層）は10ラインから東に約1.2m付近であることが判明した。さらに、この被覆粘土の反対側（西側）への広がりをおさえることを目的として西拡張部先行トレンチの東端部を掘り下げた。S E区で確認したものと同一と考えられる粘土層（図9-376層・377層）を検出し、被覆粘土の広がりをおおむね把握した。

（秋山奈美）

**墳丘の構築方法**（図12） 調査の結果、墳丘の構築過程は、ドーム状盛土構築までの第一段階と、ドーム状盛土を覆い墳丘をさらに高くする第二段階に分けられることがわかった。西拡張部の先行トレンチで検出した基盤層上面の標高は約29.1mで、約6m西（前方部寄り）にあたる第2次調査の第2トレンチで検出された基盤層上面の標高とほぼ一致する。墳頂の標高は約32.6mであるから、墳丘の大部分が盛土で形成されていることが明らかである。また、基盤層上面で旧地表面は検出されていないことから、墳丘を構築する前に整地されている可能性が考えられる。

墳丘構築の第一段階では、埋葬施設を精良な粘土で被覆した後に、その周囲に被覆粘土に似た粘質土を小さな単位で施す（355層・356層・357層・359層・362層）を施す（図12②）。その後、しまり・粘性ともに強く、クサレ礫を含む黄・黒・赤褐色系の大きな単位の盛土を用いて、墳丘の中心を高くし、その高さに合わせるように平坦に近い面を形成するという工程を3回ほど繰り返す（図12③）。

この工程の後、しまり・粘性ともに強い均質な赤褐色土（318層）をドーム状に盛る（図12④）。このドーム状盛土頂部は標高31.6m付近に直径2.5mの正円形を呈する平坦面を形成し、その中心はおおよそ推定後円部の中心と一致する。このことから、ドーム状盛土は墳丘の構築過程における中途の成形面としての意味を持っていた可能性が考えられる。なお、このドーム状盛土の裾は墳丘中軸線沿いの地層断面では、東はトレンチ東端から、西は12ライン付近まで確認されている。

第2段階では、まずドーム状盛土の周囲に灰色の粘質土（図10-317層）を置く（図12⑤）。第5次調査ではSW区の南西隅と西拡張部のみで平面的に確認されたが、その他の地区でも墳丘外寄りのほぼ同じ高さの壁面で確認されることから、ドーム状盛土裾の平坦部を環状にめぐるとみられる。これらの灰色粘質土層は、ほぼ水平に並ぶ径30～40cm・厚さ10cm前後のブロックで形成されており、植物の付いた表土の塊（ターフ）を敷き並べたものである可能性が高い（図版3）。

次に、ドーム状盛土頂部の平坦面の高さに合わせてその外側にも平らな面を拓げるように、ドーム状盛土の周囲から斜面にかけて大きな単位の黄・黒褐色系の盛土を重ねていく（図12⑥）。なお、NE区においては、このうちの黄褐色土層中の標高約31.7～31.8m付近で、直径10～40cm程度の円礫や角礫が列状に並べられる（図10）。これは、墳丘築造時の作業区画などであった可能性も考えられる。

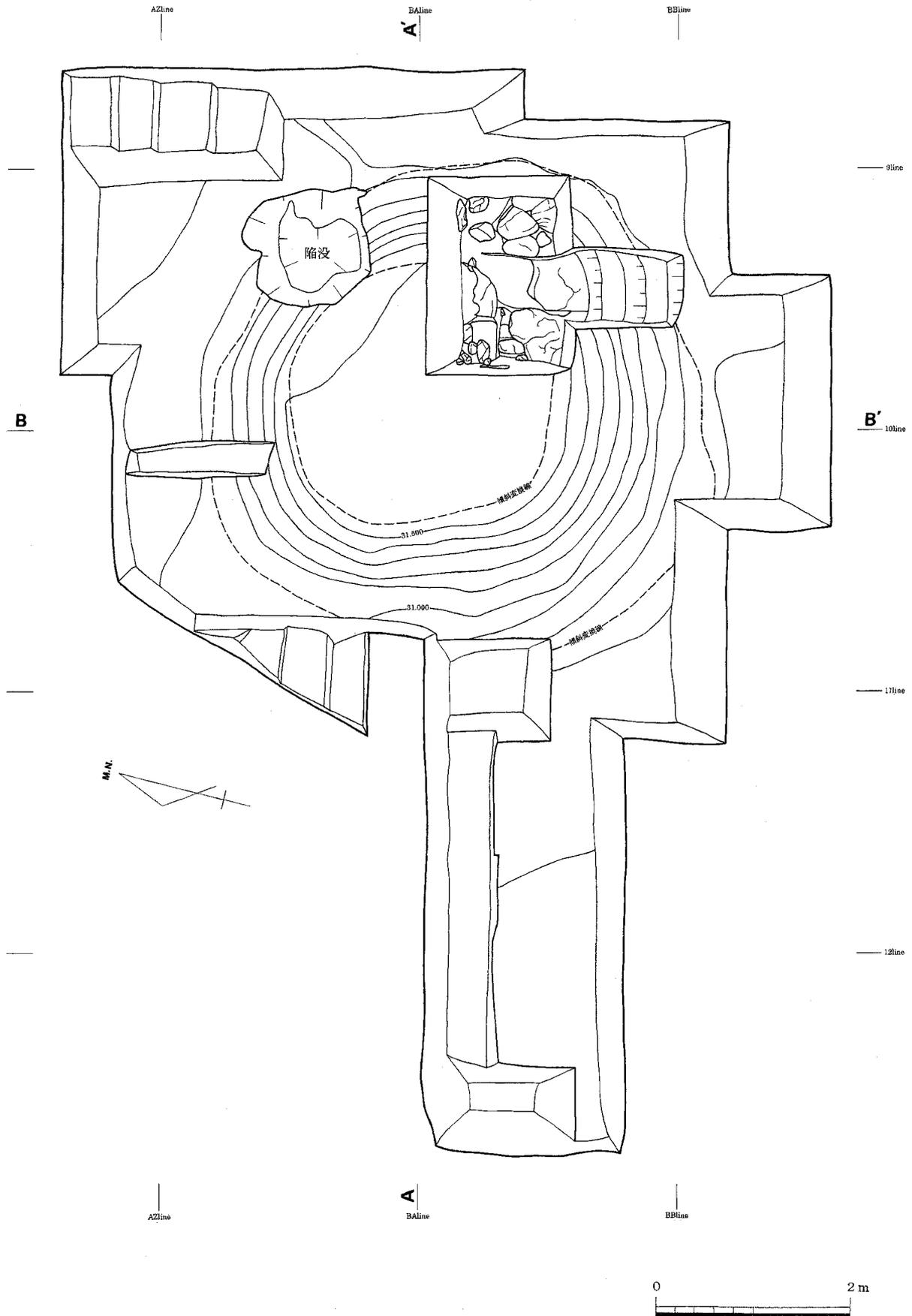


図9 墳頂部トレンチ 平面図

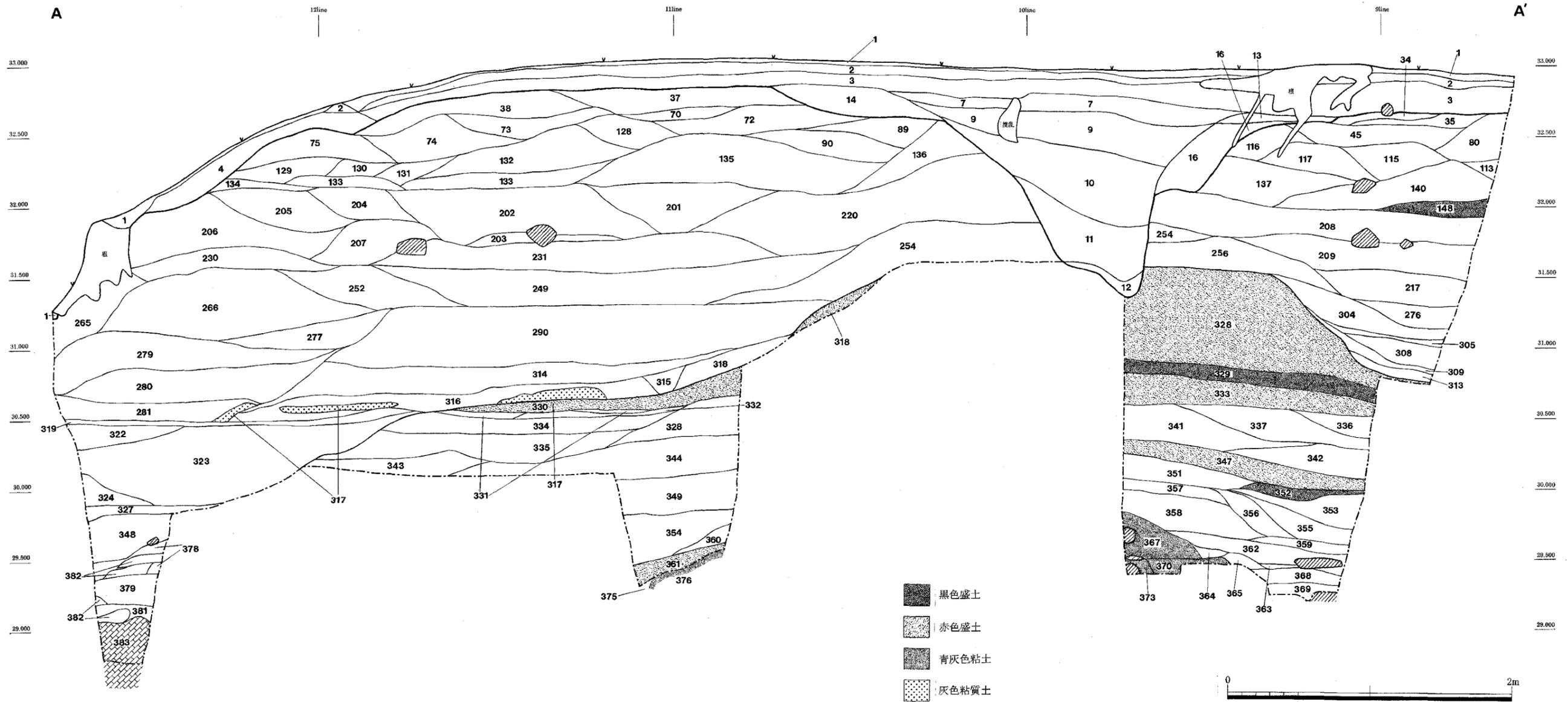


図10 墳頂部トレンチ 土層断面図(1) (土層注記はp. 26 ~ 29)

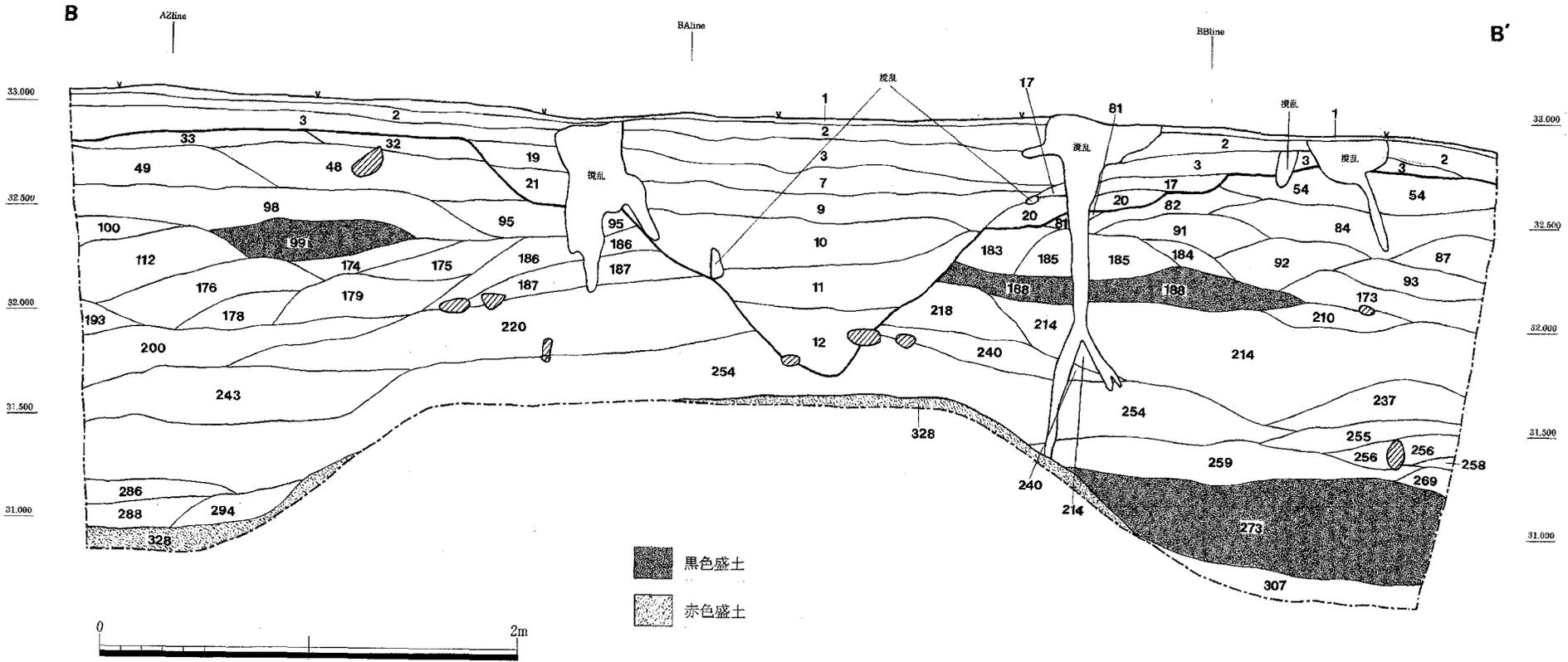


図11 墳頂部トレンチ  
土層断面図(2)  
(土層注記はp.26~29)

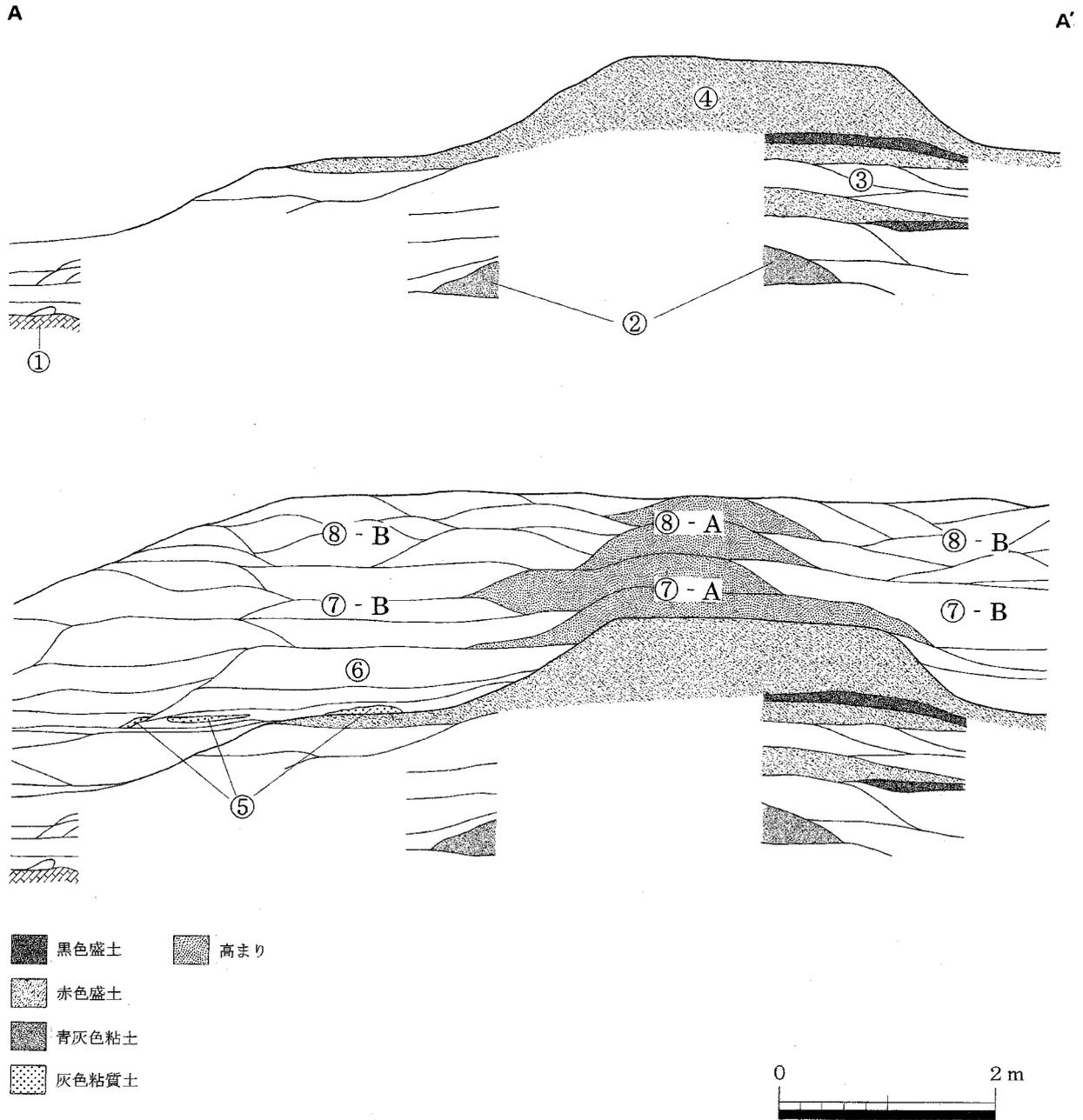


図12 墳丘の構築方法

その後、黄・橙褐色系の土を用いてまず墳丘の中心に高まりをつくり、次にその周囲を同じ高さにそろえるように盛土を施すという工程を繰り返す。その際、標高32.0～32.5 m付近で黒色の土が墳丘の斜面側に帯状に施されていることが面的にも確認されている。途中途切れてはいるが、環状にめぐっていたものと思われる(図12 ⑦ - A→⑦ - B)。

最後に、標高約32.5 m付近から上は暗黄褐色系の土によってそれまでよりも小さな単位で盛土を施し、墳丘を完成させている(図12 ⑧ - A→⑧ - B)。(大石恵子)

**埋葬施設** SE区の先行トレンチで確認した角礫は、竪穴式石室の控え積みの一部である可能性が考えられる。この角礫を覆う精良な淡青灰色粘土(図10-367層・370層・373層)は、先述のように、東の方は10ラインから東1.2 mにまでしか及ばないことが判明した。同じ粘土の西の端近くとみられる部分(図10-376層・377層)を、西拡張部東端の先行トレンチ内で検出した。いっぽう、NE区のドーム状盛土上面およびその上層でみられた陥没の痕跡は、断面および平面での検討によって、末広がり状に下に行くほど大きくなっ

ていることが確認できたことから、内部空間の崩落による陥没であり、その空間が竪穴式石室である可能性が高いと判断できる。そうであるとすれば、この陥没の位置と、SE区および西拡張部の先行トレンチ内で検出された淡青灰色粘土の位置から、埋葬施設の方向はほぼ墳丘中軸線に沿うと考えられる。(大石恵子)

**出土遺物** 土器片・石器片が西拡張部の盛土内から出土している。土器片の多くは323層・333層から出土しているが、小片のため詳細は不明である。時期の特定できる遺物として322層から出土した弥生時代後期の高杯が挙げられる。また石器片には343層から出土した大型蛤刃石斧と323層から出土した不明石器片がある。(大石恵子)

## 5. 出土遺物

**埴輪**(図14-1) 前方部Cトレンチと後円部北トレンチから、埴輪片が数点出土している。図示した1点は、朝顔形円筒埴輪の口縁部片で、外面はタテハケ、内面はナナメハケが施されている。また表面に黒斑はみられない。その他の埴輪片に関しては、摩滅のため、大きさ・調整ともに良好なものはないが、外面にタテハケが観察できるものを4点、内面にナナメハケが観察できるものを1点確認できる。いずれも2cm前後の小片のため、部位は不明である。これらの特徴より、時期は川西編年IV～V期に当たると思われる。しかし、これらの埴輪片が勝負砂古墳に樹立されていたという確証はない。(森井敦子)

**須恵器**(図14-5・6) 前方部Cトレンチ・後円部北トレンチから破片資料が出土している。確認できる器種は杯・高杯・甕・瓶類がある。これらはすべて後世の盛り重ね土と考えられる層から出土している。そのほとんどが小片であるため時期の確定は困難である。ここでは実測可能な2点を図示した。高杯(5)は、復元口径14.1cm、器高8.7cm。脚の内面にしぼりの痕がみられ、口縁端部は丸くおさまられていることからTK209型式以降と考えられる。甕(6)は、底部復元径11.5cm、残存高12.6cm。高台付きである。外面はタキ目文、内面に同心円状当て具痕がみられる。(秋山奈美)

**弥生時代の遺物**(図13) 墳頂部トレンチの盛土内から出土した高杯の杯部(2)と大型蛤刃石斧(1)、墳丘南側の畑で表面採集された高杯の脚部がある。墳頂部トレンチでは他に盛土中から土器片が数点出土し

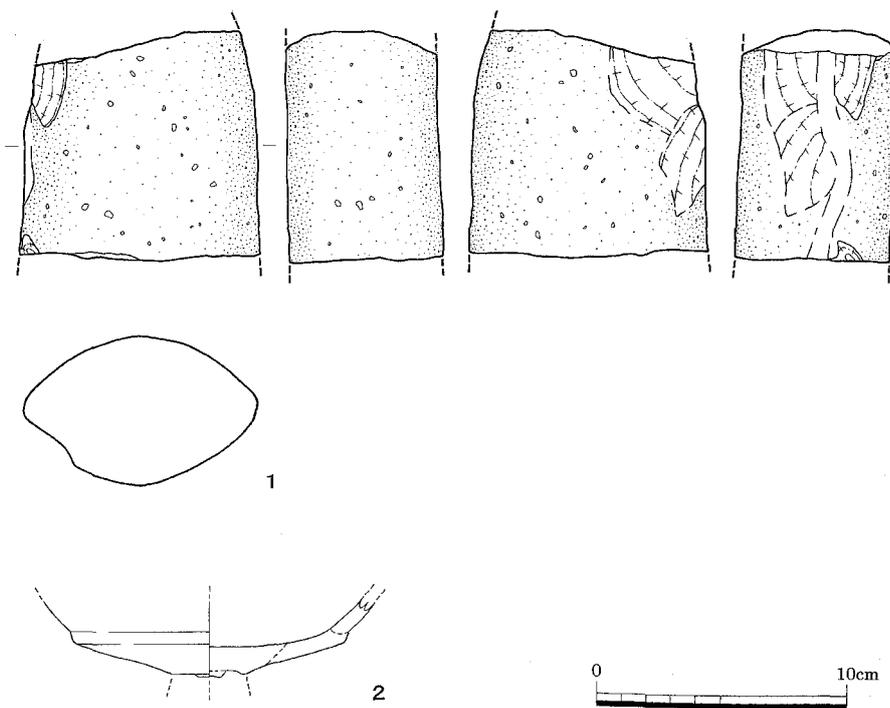


図13 出土遺物(1)

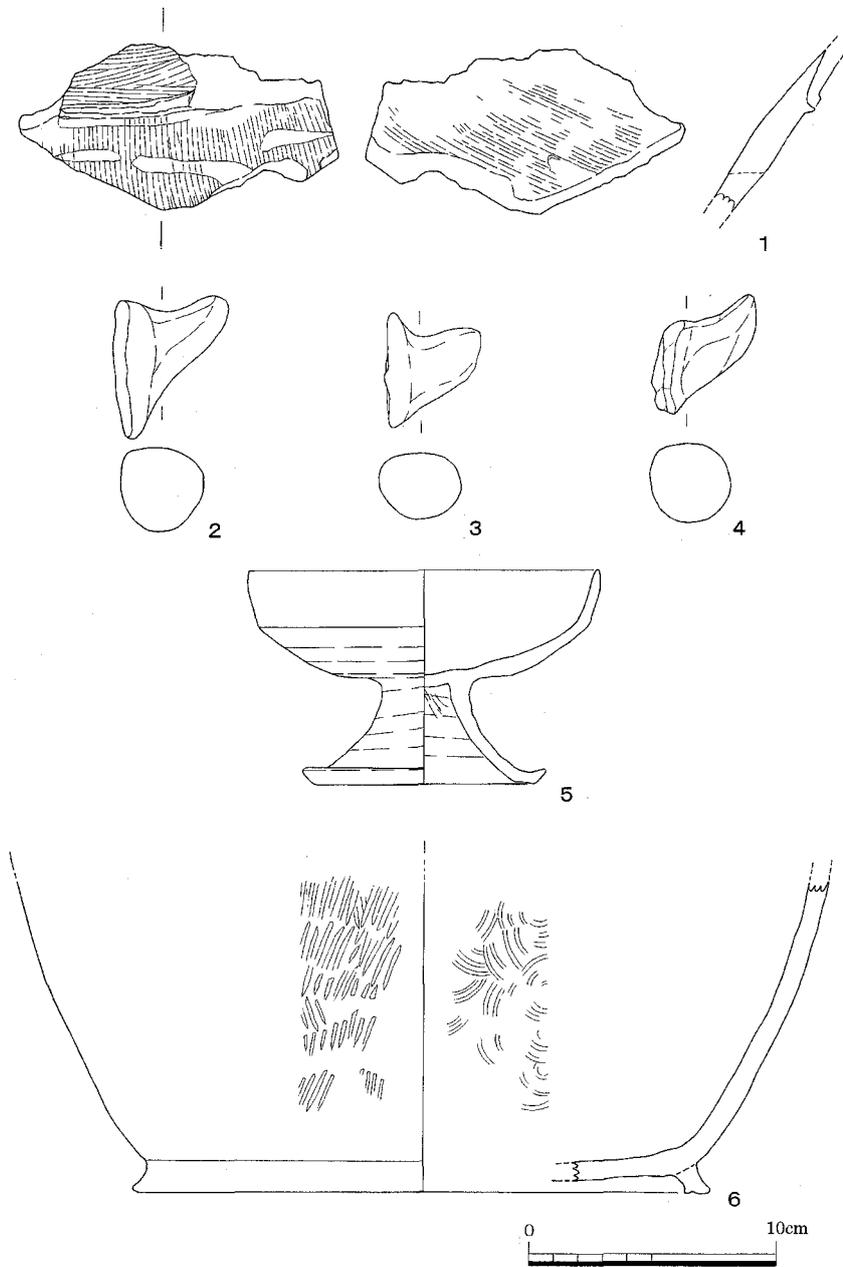


図14 出土遺物(2)

ているが、いずれも小片のため詳細は不明である。墳頂部トレンチから出土した遺物はいずれも古墳築造時に混入したものと考えられる。また、前方部トレンチ出土の高杯の杯部は現存高約3cmで、内外面とも風化しているが、内面の一部にヨコナデが施されている。また、底部には脚部を粘土で接合した痕跡がみられる。採集された高杯の脚部は現存高約5cmで、内外面とも一部にヨコナデが施されている。いずれも時代は弥生時代後期と考えられる。太型蛤刃石斧は基部と刃部が欠損しており、現存長9.2cm、幅9.6cm、厚さ6.1cmで敲打痕がみられる。石材は流紋岩質凝灰岩と考えられる。盛土の採土先に、弥生時代の遺構あるいは遺物包含層があったと推測される。(大石恵子)

古代以降の遺物(図14-2~4) 古代以降の遺物は、前方部Cトレンチから陶器片・磁器片・瓦片が出土している。また備前焼のすり鉢と思われる破片が1点出土しており、時期は中世後半以降のものであると考えられる。陶器片・磁器片・瓦片はすべて後世の層からの出土であり、近現代のものである。

後円部北トレンチからは土師質の甑の取手が3点出土している。それぞれの大きさが異なることから、同一個体ではないと考えられる。

(村瀬奈穂)

**出土遺物の概況** ここで取り上げた第5次調査の出土遺物も含め、これまでの調査では、ついに古墳の築造に確実に伴う遺物を確認するに至らなかった。

推定前方部西側など、周溝とみられる溝の一部の部分から出土した円筒埴輪片も、本古墳に伴うか、あるいは隣接する古墳から流入したものか、確固たる判定を躊躇させる出土状況である。

いっぽう、墳丘盛土内から打製・磨製の石器片や弥生土器片が少なからず検出されることから、本墳の盛土採取先となった近隣の尾根上を中心に、弥生時代もしくはそれ以前の時代の集落等が存在した可能性が高い。また、墳丘上および周辺に古代～近世の土器片などが一定の密度で散在することは、本墳付近がそれ以後の時代に人々の主たる生活圏内であったことを示している。(松木武彦)

## 第4章 調査成果のまとめ

勝負砂古墳の第5次調査は、墳丘と埋葬施設に関して、いくつかの新しい知見をもたらすものであった。以下にそれらを整理し、合わせて今後の展望と課題を示しておきたい。

まず墳丘については、推定後円部北側裾の後円部北トレンチにおいて、第2次調査で検出した周溝状の掘り込みの続きを検出し、それが推定後円部の外形に沿って走ることを確認した。これが周溝であることはほぼ確実とみられ、少なくとも推定後円部北側には幅6.5m前後の周溝が走る可能性が高くなった。この周溝が、これより東や西、すなわち推定後円部の背面（東側）や推定前方部の方向にどのように伸びるのかを確認することが、今後の目標となろう。

推定前方部前端の旧状は、前方部Cトレンチ部分の後世の改変が予想よりも激しかったために精確には復元できなかったが、第4次調査の前方部Aトレンチ・前方部Bトレンチの状況も考え合わせると、Bトレンチで検出していた溝状掘り込みを前方部端の周溝と解釈することが、原状ではもっとも蓋然性が高い。全長約38mの前方後円墳とする第1次調査時の推定が確からしさを帯びてきたわけであるが、これをさらに確実なものとするためには、推定前方部と推定後円部とが実際にどのような形で接続しているのかを見極めなければならない。また、推定後円部背面、すなわち墳丘の反対側の墳端を押さえることなどによって、墳丘の精確な規模を確定する必要がある。

墳頂部では、現地地表下3m以上の深いところに堅穴式石室とみられる埋葬施設があつて、一部が崩壊・陥没している可能性が高いものの、盗掘を受けない状態で保全されているという推測が現実味を帯びてきた。この埋葬施設は、第5次調査までの知見を総合する限り掘り込み墓壇をもたず、設置後にその上部に盛土を施して墳丘を造成する様式のものであると考えられる。この盛土が、その途中に、「ドーム状盛土」とよぶ中途整形面をもつなど、きわめて入念かつ計画的になされていることは前章で詳述したとおりである。

北東750mにある天狗山古墳も、同じように墓壇のない堅穴式石室を埋葬施設とすることが、岡山大学の発掘調査で確かめられている。天狗山古墳は墳丘長60mの帆立貝形古墳であるが、勝負砂古墳も前方後円墳であるとするれば、規模は劣るものの前方部は短小で、同じ帆立貝形の墳丘をもつことになる。このように、5世紀後葉～末にこの地域に最初に現れた首長墓である天狗山古墳と共通の要素をもっていることは、勝負砂古墳の歴史的評価を下すうえで重要であろう。勝負砂古墳もまた、推定後円部の膨大な盛土量などから首長墓クラスの墳墓と位置づけられ、天狗山古墳との関係を明らかにすることは、この地域の古墳時代史を描くための必須の課題と考えられるからである。

しかしながら、2001年以来5次にわたる調査を経てなお、勝負砂古墳の時期を明示する資料は発見されていない。時期に関する重要な情報を得るためにも、未掘のまま残されていると考えられる埋葬施設の調査に着手することが肝要であろう。

(松木武彦)